

1. 京都の民具収蔵施設について

印南 敏秀（技師）

1. はじめに

山城郷土資料館では民具を中心とした文化財の所在状況を知るため、南山城地域の文化財収蔵施設を昭和57年度に調査した。その成果の一部は昭和58年春の企画展「まちの資料館」展で、図録による施設の紹介と、収蔵民具をテーマ別に分けて展示し紹介した。

当時南山城地方には博物館相当施設は当資料館しかなく、35の施設はいずれも本来文化財を収蔵・展示するためのものではなかった。小学校・中学校の空き教室、公民館や民家の一部利用と、施設の種類や収蔵規模も様々な「まちの資料館」と呼ぶべきものであった。

35のうち29が民具の収蔵施設で大半を占めた。その中には10点程の小規模なところから、500点を越す資料が系統的に見やすく並び、公開にたえる内容をもつ施設まで収蔵点数、収蔵状況にもばらつきがあった。

こうしたまちの資料館は、地域住民が主体となって民具の収集展示を行ったところに特

色がある。そして地域のくらしを伝え考える手段として民具が選ばれたのである。集められた資料は専門家の指導もなく、地元民の善意により寄贈された資料が中心で、全体としてのまとまりもなく、種類にも片寄りがあるが、かえってそれが地域の性格を反映しているように思える。一つ一つが実に個性的な存在であり、実際に訪ねるまで予想もつかない。それがまちの資料館を訪ねるたのしみであり、同時に理解するむつかしさでもあった。

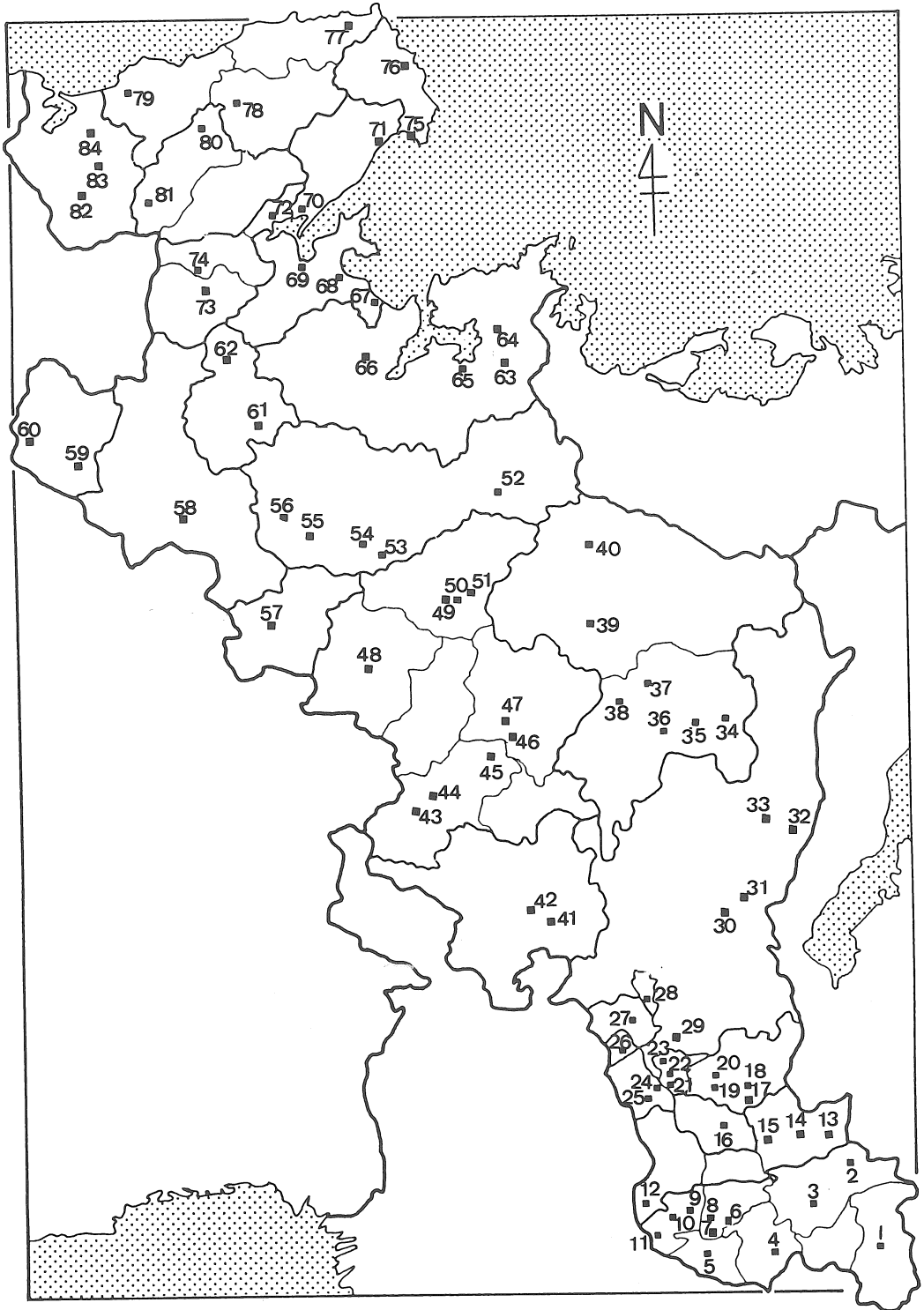
まちの資料館の調査につづいて、私は京都府教育委員会文化財保護課の有形民俗文化財基本調査に参加し、丹波、丹後の民具収蔵施設を調査する機会にも恵まれた。

この報告は、この2つの調査成果に最近急増している市町立の資料館、及び府の施設を追補し、京都府下の民具収蔵施設の概要を紹介したものである。施設をとおして地域の民俗文化財に対する地元や行政のとりくみ方、関心のあり方なども伺え、民具研究のみならず地域文化を考える上でも興味深い。




伊勢田小学校社会科学博物館

京都府下の民具収蔵施設分布図



京都府の民具収蔵施設一覧表

<表注>

1. 京都府下の民具（有形民俗文化財）収蔵施設を南から北へ、山城・丹波・丹後の順に記したもので、番号は分布図番号と一致する。
2. 施設名は、民具を収蔵展示する場所を含めた施設の総称とした。「本庄中学校郷土資料室」は「本庄中学校」とした。
3. 資料内容は、文化庁の民俗文化財調査収集の手引きによる分類で基本的にはあらわしたが、特定の資料がことに多い場合や、筏・漆関係用具など特色のあるものについてはより細かな内容によって述べた場合もある。
4. 収蔵点数は、資料台帳を備えている施設が少なく、台帳があっても収集後に新たに寄贈をうけたり、いたんで処分される場合など正確な総点数はつかみにくのが現状である。したがって多くは概数である。
5. 備考では、施設について記した。「○立」は民具を含めた郷土資料を収蔵展示するための公共施設であり、原則的には一般公開されている。「私立」は、 福寿園、上林商店、

大倉酒造等が独自に開設した収蔵展示施設で公開の場合が多い。「○管」は非公開で、見学の場合は連絡を必要とする施設である。「市・町・村管」は、各教育委員会等が専門施設がないため一時的に保管していることを、「学管」は、小中学校の管理、「区管」は公民館などを使い地元区民や有志が管理していることをあらわしている。全体の内訳は次のようになる。

府立 3, 市立 4, 町立 6, 私立 4
市管 6, 町管 8, 村管 1, 区管 8
小学校管 37, 中学校管 2

なお、今回は準備中で含めていないが、昭和62年4月には八木町立郷土資料館が開館し町立は7ヶ所となる。

6. 民具を収蔵展示するが今回とりあげなかった施設がある。京都市内に多い、民具を美術的観点に力点をおき、地域性や機能性を考慮せず民芸品として展示する施設である。河井寛次郎記念館（市内東山区五条坂）、清滝民芸館（市内右京区嵯峨清滝町）などである。

番号	施設名	所在地	資料内容	点数	備考
1	南山城農村婦人家	相楽郡南山城村田山	衣・食・住・農耕・紡織・運搬用具	44	村管
2	湯船小学校	〃 和束町湯船	衣・農耕・山樵・紡織・運搬用具	10	学管
3	中和東小学校	〃 和束町釜塚	衣・住・農耕・紡織・民俗知識・通過儀礼用具	50	学管
4	加茂小学校	〃 加茂町里	衣・農耕・交易・信仰用具	20	学管
5	木津町教育委員会	〃 木津町木津	食・住・農耕・山樵・漁労用具	147	町管
6	府立山城郷土資料館	〃 山城町上粕	南山城の衣・食・住・生産生業全般及び信仰用具	801	府立
7	福寿園資料館	〃 山城町上粕	製茶関係用具	120	私立
8	山城町教育委員会	〃 山城町上粕	農耕・養蚕・製茶用具	100	町管
9	精華町教育委員会	〃 精華町北福八間	食・住・農耕・山樵・紡織・運搬用具	66	町管
10	自衛隊祝園弾薬支処	〃 精華町北福八間	住・農耕・旧陸軍用具	50	国管
11	東畑資料館	〃 精華町東畑	衣・食・住・農耕・山樵・紡織用具	200	区管
12	田辺町郷土民俗館	綴喜郡田辺町打田	田辺町内のほぼ全種類の用具	500	町管
13	奥山田小学校	〃 宇治田原町奥山田	衣・食・住・農耕用具	10	学管
14	宇治田原小学校	〃 宇治田原町岩山	衣・食・住・農耕・養蚕・紡織・山樵・通過儀礼用具	125	学管
15	田原小学校	〃 宇治田原町郷ノ口	衣・食・住・農耕・紡織・運搬用具	73	学管

番号	施設名	所在地	資料内容	点数	備考
16	旧寺田公民館	城陽市寺田	住・農耕・紡織・製茶用具	100	市管
17	宇治市歴史資料館	宇治市折居台	農耕・製茶・漁労用具	200	市立
18	上林記念館	” 宇治	製茶関係用具	100	私立
19	伊勢田小学校	” 伊勢田	衣・食・住・農耕・製茶・漁労・運搬・交易用具	100	区管
20	巨椋池土地改良区事務所資料室	” 横島	衣・食・住・農耕・漁労・製茶用具	100	私管
21	久御山町中央公民館	久世郡久御山町田井	衣・農耕・漁労用具	100	町管
22	御牧小学校	” 久御山町相島	住・農耕・漁労・交易用具	10	学管
23	建設省久御山排水機場	” 久御山町東一口	漁労用具	10	町管
24	都々城市民センター	八幡市上津屋	衣・食・住・農耕・製茶・通過儀礼用具	350	市管
25	有知郷市民センター	八幡市内里	農耕用具	300	市管
26	大山崎小学校	乙訓郡大山崎町円明寺	農耕用具	50	学管
27	長法寺小学校	長岡京市長法寺	衣・食・住・農耕・運搬・交易・信仰用具	211	市管
28	第三向陽小学校	向日市森本	衣・食・住・農耕・運搬・交易用具	100	学管
29	大倉記念館	京都市伏見区本材木町	酒造関係用具（6,120点が京都市指定文化財）	10,000	私立
30	府立総合資料館	京都市左京区下鴨半木町	府下のほぼ全種類に及ぶ用具	14,245	府立
31	松ヶ崎立正会館	京都市左京区松ヶ崎堀町	食・住・農耕・運搬用具	100	財管
32	大原郷土館	京都市左京区大原勝林院町	衣・食・住・農耕・山樵・紡織用具	160	私立
33	静原小学校	京都市左京区静市静原町	住・農耕・山樵用具	120	学管
34	黒田小学校	北桑田郡京北町黒田	食・住・農耕・養蚕・筏用具	50	学管
35	常照皇寺	” 京北町井戸	農耕用具	20	私管
36	山国小学校	” 京北町塔	衣・食・住・農耕・山樵・筏・運搬用具	119	学管
37	弓削小学校	” 京北町上弓削			学管
38	矢代小学校	” 京北町矢代中	衣・食・住・農耕・山樵・紡織・信仰用具	87	学管
39	宮島小学校	” 美山町島	衣	310	学管
40	鶴ヶ岡資料館	” 美山町鶴ヶ岡	衣・食・住・農耕・山樵・紡織・筏・娯楽用具	180	区管
41	亀岡市文化資料館	亀岡市古世町	} 食・農耕・運搬・紡織・遊技用具	} 300	市立
42	亀岡市郷土館	亀岡市吉川町			市管
43	西本梅小学校	船井郡園部町南入田	衣・住・農耕・紡織・交易用具	55	学管
44	摩気小学校	” 園部町穴人	衣・食・住・農耕・紡織・運搬・交易用具	90	学管
45	川辺小学校	” 園部町船岡	農耕・養蚕・山樵用具	40	学管
46	殿田小学校	” 日吉町殿田	衣・農耕・養蚕・紡織・筏用具	50	学管
47	日吉町教育委員会	” 日吉町保野田	衣・食・住・農耕・山樵・川漁・紡織・筏用具	350	町管
48	瑞穂町資料館	” 瑞穂町大朴	衣・食・住・農耕・養蚕・山樵・製茶・運搬用具	250	町立
49	和知第一小学校	” 和知町本庄	衣・食・住・農耕・養蚕・紡織・運搬・遊戯娯楽用具	116	学管
50	和知町民俗資料館	” 和知町大蔵	衣食住をはじめほぼ全種類におよぶ。	360	町立
51	和知第二小学校	” 和知町篠原	衣・食・住・農耕・養蚕・紡織・山樵・芸能・交易用具	120	学管
52	奥上林小学校	綾部市睦寄町行道前	農耕・養蚕用具	30	学管

番号	施設名	所在地	資料内容	点数	備考
53	山家郷土資料館	綾部市広瀬町	農耕・山樵・養蚕用具	50	区管
54	山家小学校	〃 鷹巣町	衣・食・住・農耕・養蚕用具	97	学管
55	市立丹波焼収蔵庫	〃 上野町	国指定重要民俗資料丹波焼き陶器コレクション	150	市立
56	豊里東小学校	〃 栗町	衣・食・住・農耕・養蚕用具	160	学管
57	三和町郷土資料館	天田郡三和町千束	衣・食・住・農耕・紡織・山樵・人生儀礼用具	60	町立
58	福知山市郷土資料館	福知山市内記	衣・食・住・紡織・製麺・社会・交易用具	900	市立
59	夜久野町立資料館	天田郡夜久野町額田	衣・食・住・農耕・紡織・漆関係用具	300	町立
60	精華小学校	〃 夜久野町板生	衣・食・住・農耕・紡織・山樵・民俗知識・交易用具	62	学管
61	有仁小学校	加佐郡大江町有路	衣・食・住・農耕	100	学管
62	青少年センター	〃 大江町仏性寺	養蚕関係用具	100	町管
63	志楽小学校	舞鶴市小倉	衣・食・住・農耕・紡織用具	10	学管
64	朝来小学校	〃 朝来中	衣・食・住・農耕・養蚕・紡織用具	100	学管
65	舞鶴市郷土資料館	〃 北吸	農耕・漁労・山樵用具	60	市立
66	八雲小学校	〃 丸田	衣・食・住・農耕・養蚕・紡織・山樵・民俗知識用具	100	学管
67	由良郷土館	宮津市由良	民俗資料全般・ソーメン製造・製塩用具	350	区管
68	栗田中学校郷土資料館	〃 栗田	衣・食・住・農耕・漁労・養蚕・民俗知識用具	650	区管
69	前尾記念文庫内郷土資料室	〃 鶴賀	衣・食・住・農耕用具	275	市管
70	府立丹後郷土資料館	〃 国分	丹後の衣・食・住・農耕・漁労・紡織用具	4,000	府立
71	養老出張所郷土資料館	〃 養老	衣・食・住・農耕・漁労・養蚕・民俗知識用具	260	区管
72	岩滝町役場	与謝郡岩滝町	農耕用具等	50	町管
73	加悦町農村文化保存伝習センター	〃 加悦町明石	衣・食・住・農耕・養蚕・紡織・交易・運搬・信仰用具	806	町立
74	三河内公民館郷土資料室	〃 野田川町三河内	衣・住・農耕用具	100	区管
75	水産資料館	〃 伊根町青島	衣・食・漁労・交易用具	90	漁協管
76	本庄中学校	〃 伊根町本庄上	衣・食・住・農耕・養蚕・炭焼・紡織・交易用具	100	学管
77	宇川小学校	竹野郡丹後町上野	衣・食・住・農耕・紡織・漁労・社会生活用具	250	学管
78	弥栄町民俗資料館	〃 弥栄町溝谷	衣・食・住・農耕・養蚕・運搬用具	264	教委
79	網野町郷土資料館	〃 網野町木津	衣・食・住・農耕・養蚕・紡織・人生儀礼用具	1,000	町立
80	吉原小学校	中郡峰山町安	農耕・紡織・山樵・屋根茸用具	40	学管
81	五箇所小学校 (旧成路小学校)	〃 峰山町大路	衣・食・住・農耕・山樵・運搬・人生儀礼用具	200	町管
82	川上小学校	熊野郡久美浜町畑	衣・食・住・農耕・紡織・養蚕・娯楽・交易用具	150	学管
83	佐濃小学校	〃 久美浜町安養寺	衣・食・住・農耕・山樵・運搬用具	400	学管
84	田村小学校	〃 久美浜町関	衣・農耕・紡織用具	40	学管

2. 民具収蔵施設のなりたち

調査の結果、収集活動の契機は大きく2つあることがわかってきた。

民具は近代化のなかで機械化され、変化していくが、ことに第二次大戦後の高度成長期

を境にして、産業構造や生活様式が変化し、日常の生活用具や生産用具といった基本民具が工場生産品にかわる。こうした急激な変化のなかで民具を保存しようという気運が高まる。当初の収集者は使用者であり語部でもあった。そして、この活動と収蔵の場は地域の

小学校を中心に展開されていくのである。

民具収集のはやい例として久美浜町田村小学校がある。ここでは昭和20年代末から30年代初めにかけて、渋谷先生が社会科学習の教材として地元民の協力を得て民具を収集し、郷土資料室をつくる。丹後地方では、ここが先駆となり、小学校での民具収集がはじまったという。

小学校での社会科学習の教材としての民具利用は、小学校高学年の授業に郷土学習が組み込まれ、近年ますますさかんとなっている。実際に地元古老の体験談を授業にとり入れ、話をわかりやすくするために民具を使ったり、米づくりの実践のなかで民具を使うなど、見るだけでなく体験を伴う学習へと進展しつつある。

また、小学校の民具収集の契機として、学校創立100周年記念事業と結びついた例が意外に多い。奥山田小学校、宇治田原小学校、田原小学校、山国小学校等で、時期的には昭和40年代末から50年代はじめに集中している。学校・育友会や卒業生である地元民の総力が結集されるから、内容も充実している例が多い。下宇川小学校郷土資料室（現在の宇川小学校所蔵資料）もそうしたなかの一つで、収集当時の熱気を『下宇川小学校創立百周年記念誌』により見てみたい。

「わたしたちは、暮しの場であるふるさとを育て、ふるさとを守りきるつとめや願いをみな持っています。また、学校は地域の文化センターとしての役割もなっています。これらの願いや期待にこたえるため、開校百周年記念事業の一つとして、昭和48年度に、ときの安田正明校長と教職員、井上朝勝育友会長と会員のみなさん、そして校区民あげでの協力により郷土資料館がもうけられました。

過ぎしふるさとの人々が手にした陳列品700余点から、ふるさとの過去及び現在を知り、ふるさとを育てるかてとしたいと思います。」

まさに、民具収集の目的や意義が言いつく



宇川小学校の民具 下宇川小学校郷土資料室の資料は、昭和50年学校統合により宇川小学校に移り、昭和60年生徒数の増加で平診療所に現在は保管している。収蔵資料からは大人と子供のマネキン人形を使いわかりやすい展示を行い、また資料の程度もよく、郷土資料室づくりに対する地域の盛りあがりが見える。一日もはやい復帰がまたれる。

されている感がある。

次に、卒業生から卒業記念として送られた農具が発端となり、郷土資料館に発展した宮島小学校の場合を、『宮島郷土資料館の栞』によってみたい。

「昭和47年3月に当時本校の卒業生たちが卒業記念として農機具を主に約数十点を蒐集したのが発端になり、これを育友会の手によって充実発展させるべく郷土資料館への構想がねられた。

昭和48年度において、これの基金を得るため府へ補助金を申請したところ、当局のご理解のある計いによってこれが認められ、18万円の補助金が下付された。これに合わせて育友会が主管して、宮島地区内の皆様にご寄付を募ったところ39万余円のご芳志を得ることができた。これらを基金にして、昭和49年度において、育友会役員を中心に資料の蒐集につとめる一方、館内の内装工事と資料の整理と展示陳列をなした。

特に館内にある「農家風台所」「かまど」「唐

郷土資料館の菜



宮島小学校
宮島小学校校友会

表紙面独立の趣旨

「郷土資料館の菜」の表紙に続き資料館設立の趣旨、次いで民具1点毎に番号・資料名・提供者名・資料の用途及び使用年代といった項目の説明があり、最後に経過の概要、主な展示資料の解説がつく。施設及び民具についての基本事項が要領よくまとまり、学校教材や見学者資料等様々な要求にも答えてくれる。

「郷土資料館の菜」(宮島小学校) 表紙に続き資料館設立の趣旨、次いで民具1点毎に番号・資料名・提供者名・資料の用途及び使用年代といった項目の説明があり、最後に経過の概要、主な展示資料の解説がつく。施設及び民具についての基本事項が要領よくまとまり、学校教材や見学者資料等様々な要求にも答えてくれる。

- ※ 資料名 提供名 資料の用途及び使用年代
- 一 花 立 て 平川基幹 祭客の一種
 - 二 から け 香 丸山源平 祭客の一種
 - 三 炬 燈 丸山源平 祭客の一種
 - 四 か ん じ き 香の多い山などへ行く時に穿くもの
 - 五 深 靴 祭客の一種
 - 六 番 番 靴 祭客の一種
 - 七 テラジロ 祭客の一種
 - 八 アイロン 祭客の一種
 - 九 ストロー 祭客の一種
 - 十 杖 藤田芳 祭客の一種
 - 十一 トパン 山崎 祭客の一種
 - 十二 ロパン 中道源 祭客の一種
 - 十三 籠 村島啓 祭客の一種

日]「つるべ井戸」等の復元は全て育友会員の手によってなされたものである。(後略)」

先の記念事業のように一度には成らなかったが、ねばり強く、知恵を出しあって完成にこぎつけた経過がよくわかる。

次に紹介する伊勢田小学校は、前述の学校のように愛着深い校舎ではなく、昭和49年に宅地化が進み新設された学校で、開校と共につくっためづらしい例である。『社会科学博物館説明書』にはその経緯を次のように記している。

「伊勢田小学校は昭和49年にできました。伊勢田町の人たちは、自分たちの町に小学校ができたので、たいそう、よろこびました。伊勢田町の人たちは、あたらしくできた伊勢田小学校を、すばらしい学校にするには、どうしたらよいか、いろいろ話しあったすえ、学校の中に博物館を作ることになりました。史友会、喜老会、育友会の人たちが中心になって、博物館に入れる、しなものをあつめました。町の人たちは、家にある古い道具などを勉強にやくだつよう、どしどしもちよりました。大きい船もはこばれてきました。クレー

ン車を持っている町の方は、クレーンで船を2階まで持ち上げてくださいました。このように、伊勢田町のひとびとの、よい学校をつくりたい、というねがいときょうりよくによって、この博物館は、できたのです。」

以上、小学校の民具収蔵展示について思うのは、きっかけはどうぞであれ、小学校と地域住民の親密な協力関係である。下宇川小学校百年誌に「学校は地域の文化センターとしての役割もになっています」とあるのは、両者の信頼関係をよく表わしている。小学校は地域の子供の育成の場であり、成人してのちも心のよりどころである。だから、すばらしい学校にするにはどうしたらよいか真剣に話し合い考えた。その一つの結論が民具を集めた郷土資料室づくりであった。このことは地域文化にとって、民具がいかに大切な資料であるかということ、そこに生活した人々がはやく気付いたということである。そして、これら地域の先駆的ともいえる運動は、近年の公立資料館建設につながっていくのである。

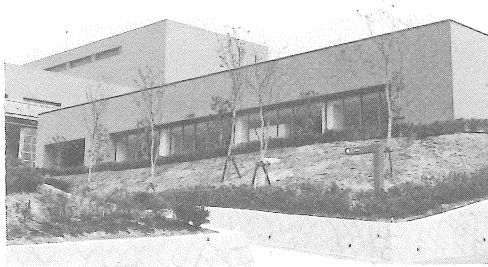
次に近年さかんに建設が進められている、市町域を対象とし、民具を含めた総合文化施

設としての公立資料館がある。

当資料館を例に民具について考えてみると、すでに高度成長期は遠いむかしとなり、民具収集は困難な時代をむかえつつある。民具収集では体系的な収集と正確に民具を通してくらしを語れる語部が何より必要であるが、一地域内では体系的な収集は不可能に近く、優れた伝承者を探すこともむつかしくなっている。収集地域の広域化と緊急調査の要求が公立資料館建設の推進力となっているのである。

南山城地方は、京都と奈良といった古都の間に位置する文化の先進地であるが、公立の資料館としては昭和57年11月開館の山城資料館が最初であった。

ところが、昭和59年10月には市史編さん事業の完成をまって歴史・考古・民俗部門をも



宇治市歴史資料館（同館リフレットより転写）資料館は、文化会館・中央公民館・中央図書館との複合施設で、宇治市文化センターの一翼をになっている。

つ宇治市歴史資料館が開館し、同年11月には長岡京遷都1,200年を記念して長岡京時代の歴史と文化を展示した向日市文化資料館が開館する。現在なお、あらたな資料館建設計画をもつ市町は多い。こうした公立資料館建設は実は南山城だけにかぎらず、丹波・丹後でも同様で京都府下全体の動勢でもある。昭和60年には亀岡市文化資料館、同61年11月には福知山市文化資料館が福知山市郷土資料館として新設され、同時に三和町郷土資料館がオープンする。昭和62年4月には八木町郷土資

料館が開館することになっている。

南山城地方についていえば宅地開発に、近年の開西学術研究都市開発が加わり、開発が加速化され、旧来から村に住む人口と新住民の人口の逆転現象や、開発にともなう環境変化などにより地域社会は日常生活や氏神祭祀などあらゆる方面で伝統の見なおしを余儀なくされている。地域の歴史文化を学び、地域のくらしを考える地域文化活動の核として、資料館・博物館には、これまで以上に多様な期待がかけられている。資料館と共に地域文化活動の核となる、図書館や公会堂などの複合化も、こうした多様化のなかで必然的におこってきたものである。

そうした状況のなかで、民具に対する関心は地元から高まり今日をむかえたのである。もっとも現実には民具を収蔵できる大きな収蔵庫や、民具を体系的に展示できるスペースをもつ公立資料館は残念ながらまだ少ないのである。

3. 地域と民具

民具という言葉から人々が具体的に何を思いうかべ、またくらしのなかでなにを大切にしていたか等を知る手がかりとしてどんな民具がどのくらい収蔵されているのかを見てゆきたい。

農耕用具は84ヶ所の全施設に見られ、量的にも収蔵資料の中心を占めている。農耕用具の大半は稲作に関する用具である。稲作りは荒起しから脱穀調整に至るまで工程が複雑で、用具の改良も頻繁で、一通り揃えるだけでも大変な量と種類になり、資料は断片的とならざる得ない。地域民にとって稲作りの苦労が大変なだけ、収穫の喜びも大きくて印象のこり、まず選ばれたのである。また寄贈者の立場から地域の民具を考えた場合に、農耕具はどの家も格差が少なく、気軽に寄贈でき、結果的に集まりやすかったともいえよう。

農耕用具と共に、衣・食・住用具もたいて

いの施設に収蔵され、「生活用具」と一括して呼ぶことが多い。衣・食・住用具も、農耕用具と共に欠くことのできない身近な用具と考えられているのである。

これらに次ぐのが、養蚕・紡織用具で、養蚕については絹織物のさかんな丹波・丹後によくのこっている。現在では衣服は購入するものと考えられているが、かつては自給が原則であり、女が家族全員の衣服を織り、仕立てた。女は子供のころから母親に教えられ、嫁入りの際の機織は資格となっていた程度で、女性には何より思い出深い用具となっていたのである。



弥栄町民俗資料館展示室 昭和52年に黒部小学校の家庭科教室を移築して開設。その後収蔵室（左奥に見えるのが収蔵室の入口）と展示室を区切り、農耕と養蚕用具を中心に展示している。見学は小中学生が中心で日頃は少ないが文化祭には中心会場としてにぎわう。

こうした基本的な民具が府下全域の収蔵施設に見られることは、くらしの基本が何であり、日々のくらしのなかで何が大切であったかを民具を通して物語っている。

この他、丹後沿岸部の海水漁労用具、巨椋池周辺及び川沿いの淡水漁労用具、山間の山樵用具等は、海山川といったそれぞれの自然環境を利用した基本的な生産業用具である。

さらに、夜久野町立資料館の漆関係用具、由良郷土館の製塩用具、福知山市郷土資料館の製麺用具、保津川沿いの筏用具、南山城の製茶用具など、地域の特産品と結びついた用

具もみられる。

このように全体的に見れば、厳密な収集方針もなく、体系化も乏しく、断片的な資料しか収蔵されていないと思われがちなまちの資料館も、地域の伝統的なくらしをよく伝えていることがわかる。収集及び設立にかかわった人々の意志は生かされ、その目的は十分はたさされているといえよう。

なお、これまで「民具」という言葉を使ってきたが、まちの資料館では「生活用具」や「農具」、あるいは「郷土資料」や「くらしの資料」といったなじみ深い名称で呼ばれている。地域のだれもが容易に理解でき、共通の話題とするにはこの名称がふさわしく、そのためにも基本的な資料の収蔵が必要だったのであろう。どこを訪ねても同じような資料ばかりで、特色がないように思えたが、地域の人々には普遍的な資料が収蔵されていることが一番大切なことだったのであろう。

私自身が調査者としてまちの資料館を訪ねたとき、調査時間が限られていることもあってつい特色のある筏や諸職用具や、残存にくい人生儀礼・年中行事用具等に目がむいた。これも民具から地域を考えるための重要な資料であることにはかわりはないが、基本的な民具についてももう少し系統的に調査する必要があったのではないかと今になって思っている。

ただ、基本的な民具から地域のくらしを考えていくには資料は断片にすぎ、よほどそれぞれの地域に精通していない限り理解はむづかしいのである。

まちの資料館を訪ね、その資料をもとに語り合えるのは地元民を除けばごく限られた人々に限られる。一地区の文化センターとしての役割りは、それで大変重要なことではあるが、開かれた交流の場としてゆく努力も必要であろう。もっとも、常時開放することは物理的には無理なので、より広範な活動をつづけている専門館や、隣接する施設との交流

を強め、一部の施設で行われている学習会の場としての利用なども考える必要がある。

応々にして、民具を集め、展示するまでは一生涯めいでも、出来あがると活動しなくなることが多い。実は、集まった民具を中心に文化活動をすすめることが大切であり、そこから得られた知識や問題意識を通して、地域のくらしを考えてゆくべきではなからうか。

まちの資料館は孤立させてはならないのである。

4. まちの資料館の課題

施設も整い、収集・保存・展示活動の担当職員がいる公立資料館に比べ、多くの問題をかかえているまちの資料館を中心にとりあげてみたい。たとえ公立資料館ができて後も、まちの資料館の地域の文化センターとして、また収蔵施設としての役割りは今なおつづいているからである。

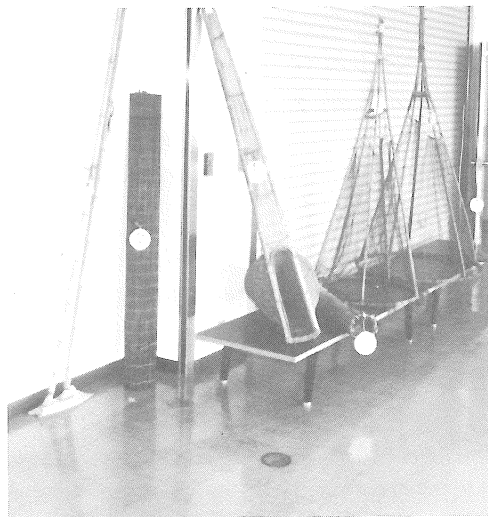
まず、収蔵資料の台帳の不備があげられる。台帳の不備は資料価値をそこなうばかりでな



旧成路小学校 民具は機能が第一で、気がつかないようなところにも様々な工夫がある。それは、体験者に教わるよりすべはない。

く、寄贈者と資料のつながりをなくし、地域民とまちの資料館との結びつきを弱めかねない。収集の当事者はわかっているため寄贈者名や住所、使用法等を記録する必要性を感じなかったのであろうが、収集後10年20年を過ぎて、今ではわからなかったり、不確かになった資料が多くなっている。数少ない台帳を完備した施設でも、現物資料へのマーキングが不完全なことが多く、資料と台帳が一致しないものもある。これなどあと少しの配慮があればと残念である。民具の戸籍が欠落してしまえば、郷土資料としての意味はうすれ、研究資料としての価値も失いかねない。

私はまちの資料館を調査で訪ねたとき、できるだけ地元古老に立合ってもらえるようあらかじめ依頼しておいた。そうした施設では短時間ではあったが、一つの民具を通してでも、その土地のくらしにふれることができたように思う。こうした古老がいるうちに、台帳と共に、民具のつくり方、使用法、さらには使われていた時代のくらしぶりを聞き、ま



建設省久御山排水機場 職員が収集し施設見学者のために巨椋池の漁具をわかりやすく展示している。この他巨椋池の漁具は、京都市立総合資料館、巨椋池土地改良区事務所資料室、久御山中央公民館、伊勢田小学校等に収蔵されている。

とめておく必要がある。

また、10年、20年を経て、収蔵施設は無論だが、資料の保存や管理が深刻な問題となりつつある。桶類のタガがはずれたり、竹製品の編目がばらけたり、鉄製品の錆も目立ちはじめている。民具は使っていないとかえっていたむものが多い。虫やかびの害もうけやすい。漁具は水や海水に濡れているため劣化がことに進んでいる。昭和16年に干拓が終わった巨椋池の漁具は、体験者と共に伝承が消えつつあり、その文化を伝える民具の重要性が今後ますます高まるだけに行政区画を越えた施設間の協力による保存対策を真剣に考えていかなければならない時期にきている。

巨椋池関係漁具と同様、過疎化で廃村となった前尾記念館収蔵の駒倉の民具も、かけがえのない資料となっている。

管理面では、ほこりがかかったまま収蔵展示されている資料を見かける。ほこりのかぶった民具が見るものにあたえる印象は意外に強い。日常使っていたものだけにそれは廃品同様と思うはずである。一方きれいにほこりをはらった民具は、使い手のくらしやその土地の美しい風土すらが見えてくるようで、心に美しく語りかけてくるものがある。両者の差は実にはなほだしいのである。

ところがまちの資料館はすでに述べたが収集や展示までは組織的に行われても、維持管理となると学校の社会科担当の先生個人や、地区の役員など特定の人に負担が集中しがちで、資料の清掃まで手がまわらないのが現実である。そればかりか管理担当者の交代時に引き継ぎが十分でなく、後で混乱することがある。

南山城のある小学校の先生は授業中ムシロがわからない生徒がいるのにおどろき、古ムシロをもらったのをきっかけに、稲作用具等の寄贈をうけ民具展示をはじめた。連絡してくれた農家を日曜日等にリヤカーをひっぱり集め歩き、充実したものとなったが、転勤に

より、活動は十分引き継がれず、当初の計画は後退していったという。

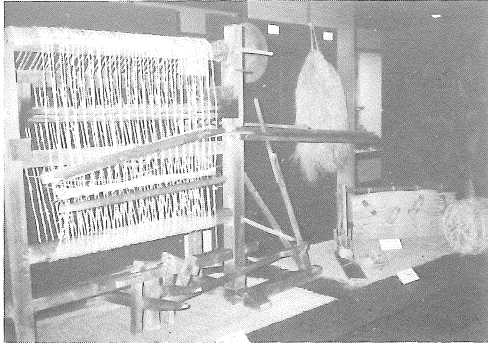
小・中学校で民具収蔵施設は正式に校内施設として位置付けられていない。それで、担当者間の引き継ぎがうまくいかなかったり、収蔵展示場所の存続にかかわる問題すらおこってくるのである。

南山城地方では近年の宅地開発で生徒数が再び増加し、民具の収蔵展示にあてられていた教室が使えなくなり、倉庫等へ民具は移され展示はおろか保存に必要な収蔵スペースすら確保出来なくなった例が少なくない。

民具も美術工芸品等と同様、適切な収蔵空間と施設が必要である。民具は一定の空間を占有する展示空間をもたなければ美しくないし、系統的に配列しなければ体験の乏しい若い人々には使い方すら理解することはむづかしい。ことに山積状況の民具には、よほど関心のある人以外は興味を示さず、利用は無論のこと、かえりみられることすらなくなるのである。

収蔵展示場所についてのなやみは、過疎化の進んでいる丹後地方でも同じで、児童数が減少し、学校統合の後の新校舎にはその場所がなく、倉庫に入れたり、もとの収蔵者に引きとってもらうなど、資料の行き場のない事態がおきている。都市化と過疎の問題は、まちの資料館においても大きな問題となっているのである。

近年は公共資料館の活動は多方面に及び、社会教育・学校教育両方の活動の場として積極的に活用されている。当資料館でも、公開文化財講座や小中学生を対象とした体験歴史教室の開催、石仏や考古学についての研究論文の募集展示、さらにはカラウスを使っての民具体験コーナーの設置と、見るだけでなく、参加し体験しながら学べる場所となっている。市町立の資料館ではより地域と密着したテーマによる学習も行われている。こうした資料館活動の多様化のなかで、今あらたにまちの



亀岡市文化資料館 左から筵織機、ワラジ作り台、タワラ編機が使用中の最もわかりやすい状態で、製品と共に展示されている。こうした展示は理想的だが、展示スペースをひろくとる必要があり、そのためテーマをしぼった展示が要求されてくる。

資料館の存在が地域文化活動のなかでとわれはじめていたのである。

たとえば、まちの資料館に収蔵された資料を新しく建設された公立資料館に移し保存活用をはかる例がある。その場合は十分に地域に説明し納得したうえで移すべきで、一部に見られるように資料を選択したり、中途半端な形で資料を残すようなことはさけるべきであろう。公立資料館との関係でいえば、現在市町管理の収蔵施設は、その多くが将来資料館が出来るまで、資料を収集保管するための施設として位置付けられていることが多い。

亀岡市は昭和45年に市制15周年記念事業の一つとして市民公会堂を移築して郷土館とし民具の収集展示し、以降収蔵を主に利用してきた。昭和60年に市制30周年記念事業として文化資料館が開館後は、郷土館から展示資料を運んで活用している。民具の展示普及活動の場としての文化資料館と、収蔵と学習研究活動の場としての郷土館の活用方法は、地域内における公立資料館とまちの資料館の今後の一つの好ましいあり方といえる。

以上、京都府下のこれまで注目されることのなかった小さな民具収蔵施設とその収蔵民具について述べてきた。まちの資料館は公立

資料館よりも古い歴史をもつものが多く、地域民によってつくられた地域に根ざした文化活動の場であった。子供達の郷土学習の場として、また親と子、地域民どうしが身近な話題で話し合える場所で、地域ではたしてきた役割は大きかったのである。今となってはそこに収蔵されている資料も貴重なものとなっているのである。まちの資料館はあるいみでは、民具に最もふさわしい施設といえる。

まちの資料館は公立資料館が出来るまでの中継ぎ的な施設で終わらせてはいけない。出来れば今後も独立した個性ある文化施設として発展してほしいと思うのは私ばかりではあるまい。資料館間の連絡を密にし、それぞれの立場を尊重しながら協力し、それぞれの個性をいかしながら発展させたいものである。

なお、最後になったが今回の報告にあたって御協力いただいた関係機関、関係者にお礼申し上げます。

注1 昭和58年4月28日から7月24日まで展示し、常設展示資料1「まちの資料館」(12頁)を作成した。希望者は資料館までお問い合わせ下さい。